

記号化される孔子

橋本敬司

一 はじめに

孔子を聖人として祭り上げるものから、実証的に人間孔子を究明するものまで、孔子研究は常に「孔子とは誰か」という問いの中にあった。これに対し、渡辺卓氏は、『史記』孔子世家の孔子を巡る出来事の記述を批判的に考察し、それらが必ずしも史実ではなく、孟子や荀子更には司馬遷などが自らの思想・主張に合わせて作り上げた説話であり、孔子とは彼等の自己投影の像であると論じた。¹ここには、「孔子とは誰か」ではなく「孔子とは何か」という新たな問いかけがあったと言えよう。

ところが、氏以降、その方法が批判的に継承されることもなく、相変わらず「孔子とは誰か」という問いの中で、実証的と称される孔子研究が繰り返されてきた。結果、先秦の様々なテキストに見られる孔子の言葉の多くは、孔子自身の言葉でも思想でもないとして、孔子を辿る上では余り顧みられなかった。

しかし、所謂儒家だけではなく、『莊子』『韓非子』までもがたびたび孔子に言及し孔子の言葉が収載されていることに鑑みるなら、今一度「孔子とは何か」という視点からそれら孔子の言説を読む必要があるのではないだろうか。そして、その方法としても、既に固定化された孔子の思想に回収されないために、表現形式の点から分析する必要があるだろう。孔子に関わる言説が、孔子に言及するものであるのか、孔子の発言であるのか、この場合一語の引用であるのか、対話であるのかといった表現・叙述形式を分析する物語論的考察である。

本稿は、先秦諸子のテキストにおける孔子の機能を分析し、中国思想史上に

おける「孔子とは何か」を考究する第一歩として、所謂儒家に分類される『孟子』と『荀子』を考察対象に、孔子の言葉の発し方を分析しその機能と存在形態の違いを明らかにする試みである。

二 引用される孔子

1 『孟子』における孔子の言葉

『孟子』の孔子・仲尼に関わる言説は四十一例あり、孔子の言葉の有無を基準に、孔子の言葉が引用される引用型と引用の無い言及型の二つに分類できる。言及型は十五例ⁱⁱ、引用型は二十六例あって二十九種類の言葉が三十一回引用されている。「自生民以來、未有盛於孔子也(公孫丑上)」と絶賛し私淑していた孔子の言葉を『孟子』が引用する文法は何か、『孟子』において孔子がどのように存在していたのかを見ていくことにする。

孟子曰、牛山之木嘗美矣。……雖存乎人者、豈無仁義之心哉。其所以放其良心者、亦猶斧斤之於木也。……孔子曰、操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與。(告子上)

『孟子』に最も多く見られるのが、このように孟子の発言中に孔子の言葉を引用するものである。発言の意味がそのコンテキストの関数であることからすれば、孔子の発言の本来の意味は、そのコンテキストが明らかでなければ、正確には理解できない。従って、「操則存……」を心だと意味づけるのは孟子の解釈に他ならない。ⁱⁱⁱ次はより一層解釈性の高いものである。

孟子曰、規矩、方員之至也。聖人、人倫之至也。欲為君、盡君道、欲為臣、盡臣道、二者皆法堯舜而已矣。不以舜之所以事堯事君、不敬其君者也。不以堯之所以治民治民、賊其民者也。孔子曰、道二、仁與不仁而已矣。暴其民甚、則身弑國亡、不甚、則身危國削、名之曰幽・厲、雖孝子慈孫、百世不能改也。詩云、殷鑒不遠、在夏后之世。此之謂也(離婁上)

「道二、仁與不仁而已矣」を堯の君道・舜の臣道とそれ以外とするのはあくまでも孟子の解釈に他ならない。『孟子』は自らに都合よくずらすことを狙って引用という方法を使ったのだろうか。

次は、孔子の言葉の発せられたコンテキストが示されるものである。

孔子之去齊、接淅而行。去魯、曰、遲遲吾行也。去父母國之道也。可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也。(萬章下)

魯を去るというコンテキストを含めた全体が伝承であり、引用なのだろうか。盡心下に次の孟子の言葉が記されている。

孟子曰、孔子之去魯、曰、遲遲吾行也、去父母國之道也。去齊、接淅而行、去他國之道也。

去齊、去魯の記述の順序が逆転してはいるが、ほぼ同様の言説であることから、この孔子の言葉は、既に「去齊、接淅而行」「去魯」というコンテキスト即ち語り手の語りを伴って伝承されたと考えられる。また、これには「可以速而速、可以久而久、可以處而處、可以仕而仕、孔子也」「去他國之道也」といった孟子の相異なる解釈が示され、孔子の言葉が、孟子の発話をコンテキストとする引用の中で区々に解釈され物語化されていることを示している。

また、盡心下の対話のように弟子達には理解できない孔子の言葉もあった。

孔子曰、過我門而不入我室、我不憾焉者、其惟鄉原乎。鄉原、德之賊也。曰、何如斯可謂之鄉原矣。曰、何以是嚶嚶也。言不顧行、行不顧言、則曰、古之人古之人。行何為蹢躅涼涼。生斯世也、為斯世也、善斯可矣。闒然媚於世也者、是鄉原也。萬子曰、一鄉皆稱原人焉、無所往而不為原人、孔子以為德之賊、何哉。曰、非之無舉也、刺之無刺也、同乎流俗、合乎汙世、居之似忠信、行之似廉絜、眾皆悅之、自以為是、而不可與入堯舜之道、故曰、德之賊也。孔子曰、惡似而非者。惡莠、恐其亂苗也。惡佞、恐其亂義也。惡利口、恐其亂信也。惡鄭聲、恐其亂樂也。惡紫、恐其亂朱

也。惡鄉原、恐其亂德也。君子反經而已矣。經正、則庶民興；庶民興、斯無邪慝矣。

どのような人を郷原といい、原人がどうして徳の賊と言われるのか、という萬章の問いに、孟子は、やはり孔子の言葉を引用して答えるが、このことは、孔子の言葉が直に萬章には響かず、解釈が必要となったことを示しており、その解釈とは勿論孟子によるものである。確かに孔子の声は引用として響いてはいるが、しかしそれはあくまでも孟子の解釈の中でのことである。

ところが、次のような対話がある。

咸丘蒙問曰…孔子曰、於斯時也、天下殆哉、岌岌乎。不識此語誠然乎哉。孟子曰、否、此非君子之言、齊東野人之語也。堯老而舜攝也、堯典曰、二十有八載、放勳乃徂落、百姓如喪考妣。三年、四海遏密八音。孔子曰、天無二日、民無二王。舜既為天子矣、又帥天下諸侯以為堯三年喪、是二天子矣(萬章上)

二十有八載、帝乃徂落、百姓如喪考妣、三載、四海遏密八音(『尚書』舜典)

孔子曰、天無二日、土無二王…(『礼記』曾子問)

子云、天無二日、土無二王、家無二主、尊無二上…(『礼記』坊記)

孔子の言葉を引用して問う弟子の咸丘蒙に、それが齊東野人の言葉であって孔子の言葉ではないことを、孟子は堯典(現在では舜典)と孔子の言葉を引用して説明する。この対話から、孟子と弟子達が共有する孔子の言葉が存在する一方で、咸丘蒙が聞き知るに至った齊に伝わる孔子の言葉があったことが分かる。また、咸丘蒙の引用を孔子の言葉ではないと否定することは、自らに伝承された孔子の言葉を絶対化正当化することであり、それほどに、孔子の言葉自体に価値があったことを示している。このことから、『孟子』においては、たとえ解釈が浸透しようとも、孔子の言葉として引用することに意味があり、それが孔子の

存在証明でもあったと言うことができよう。

次の盡心下篇の万章との問答を見てみよう。

萬章問曰、孔子在陳、曰、盍歸乎來。吾黨之士狂簡、進取不忘其初。孔子在陳、何思魯之狂士。孟子曰、孔子、不得中道而與之、必也狂狷乎。狂者進取、狷者有所不為也。孔子豈不欲中道哉。不可必得、故思其次也

これも、孔子の言葉を引用して問う萬章に、孔子の言葉を引用して答えるものであるが、孔子の言葉を引用して答えることで、できるだけ孟子の解釈を浸透させないようにしようとする意図が見られる。この問答からも、孔子の言葉であることを重視していることが分かる。

次の公孫丑との対話を見てみよう。

宰我、子貢善為說辭、冉牛、閔子、顏淵善言德行、孔子兼之、曰、我於辭命、則不能也。然則夫子既聖矣乎。曰、惡。是何言也。昔者子貢問於孔子曰、夫子聖矣乎。孔子曰、聖則吾不能、我學不厭而教不倦也。子貢曰、學不厭、智也、教不倦、仁也。仁且智、夫子既聖矣(公孫丑上)

知言を巡るこの対話においてのみ、孟子は、子貢と孔子の対話を引用する。¹⁴孔子の発言が対話の形式でも伝えられ、それを孟子が引用したのである。ただし、対話は一発言とは違い、語り手の語りにおいて構成された言説であり、明らかに語り手の解釈が浸透している。このような対話の引用が『孟子』にわずか一例しかないのは、孟子が対話の語り手の構成による孔子の言葉の引用を好まなかったからかもしれない。

以上、孟子が、みずからの解釈が孔子の言葉を覆い、孔子の物語化を進行させる可能性があるにも関わらず、引用という表現形式を選択したのは、それが、孔子の声を響かせる唯一の方法、あるいは自らを孔子と一体化させる方法だったからであろう。だからこそ、引用された言葉の中に孔子は間違いなく存在した。これは、『孟子』においては、伝えられた言葉を通して実在の孔子にたどり

着く可能性が開かれ、『孟子』が「孔子とは誰か」という問いの中にあることを示している。

2 『荀子』における孔子の言葉

『荀子』の孔子・仲尼に関する記述は四十例あるが、言及型十例と孔子が言葉を発する発話型三十例に大別でき、発話型の内引用型が六例、独語型が四例、コメント型が一例、対話型が十九例である。

『荀子』の引用に特徴的なのは、引用後「此之謂也」と言われる点である。

孔子曰、巧而好度、必節。勇而好同、必勝。知而好謙、必賢。此之謂也。

(仲尼)

故孔子曰、知者之知、固以多矣、有以守少、能無察乎。愚者之知、固以少矣、有以守多、能無狂乎。此之謂也。(王霸)

孔子曰、審吾所以適人、適人之所以來我也。此之謂也。(王霸)

『孟子』が詩や書を引用する場合にしばしば用いた修辞だが、『荀子』は、孔子の引用にも用い、自説が孔子の説と異ならない正当なものであることを明示したものの^vであるが、やはり『荀子』の解釈であることを免れない。

また『荀子』にも、『孟子』同様に、他者が引用する孔子の言葉を否定する記述が見られる。

客有道曰、孔子曰、周公其盛乎。身貴而愈恭、家富而愈儉、勝敵而愈戒。

應之曰、是殆非周公之行、非孔子之言也……(儒效)

客のグループに伝えられた孔子の言葉は、『荀子』には伝わっていなかったのだろう。『荀子』が引用する孔子の言葉は僅か五例であり、これらが『論語』『孟子』には見られないことから、『荀子』には『荀子』にのみ伝わった孔子の言葉があり、伝わる孔子の言葉を重視していたことが読みとれる。^{vi}

さらに『荀子』には、孔子の独語が宥坐、法行に各二例収載されている。以下に一例ずつ挙げる。

孔子曰、如埜而進、吾與之、如丘而止、吾已矣。今學曾未如疣贅、則具然欲為人師(宥坐)

孔子曰、君子有三思、而不可不思也。少而不學、長無能也、老而不教、死無思也、有而不施、窮無與也。是故君子少思長則學、老思死則教、有思窮則施也(法行)

孔子の独語が一章として収載される先秦諸子のテキストは、『莊子』『韓非子』のみで、各一章見られ、異なる言葉である。これらは、従来孔子の言葉ではないと一蹴されてきた言葉であるが、実は孔子の言葉が所謂儒家以外にも広く伝えられかつ重視されていたことの表れではないだろうか。『韓非子』顯學篇が、儒は八派に分かれそれぞれが真の孔子だと主張しようとして批判し、『荀子』が非十二子篇で孟軻等を痛烈に否定し自らを儒の正統と自負していたことから、たとえ一章でも自らに伝わった孔子の言葉を残そうという意志の表れだと。もしそうなら、『荀子』は『孟子』以上に孔子の言葉即ち声を重視し、解釈が浸透する引用ではない独語の形で残そうとしたと考えることも可能である。

三 語り始めた孔子

この『荀子』において最も特徴的なのは、孔子の対話が一つの物語として収載される点であり、この例が十九と最も多い。これは一体なぜか。そして、これは『荀子』が孔子に語らせたものか、それとも、対話全体が孔子の事実として伝承され、収載されたものなのだろうか。対話を収載する大略、宥坐、子道、法行、哀公、堯問の六篇は、荀子の自著とされる論説形式の天論、礼論、性悪諸篇の思想内容の相違から、従来荀子の自著とは見なされなかった篇であるが^{vii}、表現形式の点からは、伝承か荀子の自著か後学の創作かを断定することはできない。伝承であるなら、『荀子』の方が『孟子』以上に孔子の声を重視したことになり、そうでなければ、渡辺氏の言うように『荀子』が孔子をして語らせたこ

とになる。^{viii}ここでは、対話における孔子の声と語り手の語りが如何なる関係にあるのかを分析し、孔子の機能と存在について考えてみたい。

最も基本的な対話是一对一の問答で十六例ある。以下のように子路、子貢、哀公などが問い孔子が答えて終わる単純問答である。

子路問於孔子曰、君子亦有憂乎。孔子曰、君子、其未得也、…無一日之樂也(子道)

子貢問於孔子曰、賜為人下而未知也。孔子曰、為人下者乎。其猶土也。深扣之而得甘泉焉、樹之而五穀蕃焉、草木殖焉、禽獸育焉。生則立焉、死則入焉、多其功而不德。為人下者、其猶土也(堯問)

魯哀公問於孔子曰、請問取人。孔子對曰、無取健、無取詘、無取口喙。健、貪也、詘、亂也、口喙、誕也。……故明主任計不信怒、闇主信怒不任計。計勝怒則彊、怒勝計則亡(哀公)

対話であることは、孔子、子路、子貢、哀公以外に当然語り手が存在する。この引用において語り手は、対話を進めるだけの語りしかしておらず、孔子の声が強く響いている。

次は「孔子蹴然」という語り手の判断を示す声が入り込まれたものである。

魯哀公問於孔子曰、紳、委、章甫、有益於仁乎。孔子蹴然曰、…(哀公)
語り手により対話の状況が設定されるものもある。^{ix}

孔子為魯攝相、朝七日而誅少正卯。門人進問曰、夫少正卯、魯之聞人也、夫子為政而始誅之、得無失乎。孔子曰、居、吾語女其故。人有惡者五、而盜竊不與焉。一曰……(宥坐)

魯哀公問舜冠於孔子、孔子不對。三問、不對。哀公曰、寡人問舜冠於子、何以不言也。孔子對曰、古之王者……(哀公)

これら問答の状況を語ることに、語り手の自己表出意識が見られ、その状況が孔子の発言と関連することから、語り手の声は孔子の声にやや重なっていると考

えられる。

では、次はどうだろうか。孔子の答えが二つ併記されるものである。

子路問於孔子曰、有人於此、夙興夜寐、耕耘樹藝、手足胼胝、以養其親、然而無孝之名、何也。孔子曰、意者身不敬與、辭不遜與、色不順與。古之人有言曰、衣與。繆與。不女聊。今夙興夜寐、耕耘樹藝、手足胼胝、以養其親、無此三者、則何為而無孝之名也。意者所友非仁人邪。孔子曰、由志之、吾語女。雖有國士之力、不能自舉其身、非無力也、勢不可也。故入而行之不脩、身之罪也、出而名不章、友之過也。故君子入則篤行、出則友賢、何為而無孝之名也(子道)

子路が「孝之名」を巡って同じ問いを二度行い、孔子は二度異なる答え方をし、それが別々に伝承され、ようやく『荀子』において整理されたのだろうか。あるいは「孝之名」に関する孔子の言葉が、子路との対話以外に伝わっていてそれが付け足されたのだろうか。いずれにせよ語り手の構成だと読みとれる対話であるが、孔子の声に語り手の声重なっているとは考えづらい。

さらに、次をみて見よう。

孔子南適楚、屨於陳、蔡之間、七日不火食、藜藿不糝、弟子皆有飢色。子路進問之曰、由聞之、為善者天報之以福、為不善者天報之以禍。今夫子累德、積義、懷美、行之日久矣、奚居之隱也。孔子曰、由不識、吾語女。女以知者為必用邪。王子比干不見剖心乎。女以忠者為必用邪。關龍逢不見刑乎。女以諫者為必用邪。吳子胥不磔姑蘇東門外乎。夫遇不遇者、時也、賢不肖者、材也。君子博學深謀、不遇時者多矣。由是觀之、不遇世者眾矣、何獨丘也哉。且夫芷蘭生於深林、非以無人而不芳。君子之學、非為遇也、為窮而不困、憂而意不衰也、知禍福終始而心不惑也。夫賢不肖者、材也、為不為者、人也、遇不遇者、時也、死生者、命也。今有其人、不遇其時、雖賢、其能行乎。苟遇其時、何難之有。故君子博學深謀、脩身端行、以俟

記号化される孔子

其時。孔子曰、由居、吾語女。昔晉公子重耳霸心生於曹、越王句踐霸心生於會稽、齊桓公小白霸心生於莒。故居不隱者思不遠、身不佚者志不廣。女庸安知吾不得之桑落之(宥坐)

これは、対話の状況が説明され、かつ孔子の答が二つ示されるもので、語り手の存在が強く感じられる対話である。また、「越王句踐霸心生於會稽」という発言は、句踐が呉を伐つのが孔子没後の出来事^{*}であって、孔子が予言者でなければ言えないことから、これが孔子の発言でないことは明らかである。この孔子の発言は、明らかに語り手の声であって、孔子は語らされているのである。

以上は孔子が答えるだけの機能を背負う対話であるが、次はそうではない。

魯哀公問於孔子曰、子從父命、孝乎。臣從君命、貞乎。三問、孔子不對。孔子趨出、以語子貢曰、鄉者君問丘也曰、子從父命、孝乎、臣從君命、貞乎。三問而丘不對、賜以為何如。子貢曰、子從父命、孝矣、臣從君命、貞矣。夫子有奚對焉。孔子曰、小人哉。賜不識也。昔萬乘之國、有爭臣四人、則封疆不削。千乘之國、有爭臣三人、則社稷不危。百乘之家、有爭臣二人、則宗廟不毀。父有爭子、不行無禮、士有爭友、不為不義。故子從父、奚子孝。臣從君、奚臣貞。審其所以從之之謂孝、之謂貞也。(子道)

中心となる子貢との問答の前に、哀公の孝と貞に関する三度の問いに孔子が答えなかったという状況と「孔子趨出」という場面転換が、語り手によって語られ、孔子自らも事の経緯を示して、漸く子貢との問答である。この物語の狙いは孔子が最後の言葉を発することであり、単純問答型であれば、子貢が孝を問うて孔子が答えれば片づくのだが、この対話では、孔子自らがまず子貢に問いかける。ここには、相手に語らせた上で考えを説き、同時に哀公を小人として批判する狙いまでを含む仕掛けがある。この孔子は、単なる答え手ではなく、自作自演のうちに相手を誘導する、誘惑的で戦略的な語り手であった。これは「孟子」に見られなかった新たな孔子の機能である。また、この対話は単純に時間

経過のままに展開するストーリーではなく、魯哀公が孝について三度問うて孔子が三度とも答えなかったから、孔子がそのことを子貢に質し、それによって孔子の子貢批判と孝と貞の意味が語られるという、それぞれの出来事が因果関係の下に構成されるプロットを持つ物語になっている。これは正しく語り手によって構成されたものであり、孔子は、語り手によって戦略的語り手として機能させられているのである。

次は、孔子が複数の人物と対話する一対多対話であり、これも孔子がまず口を開き、最後に教訓を述べる戦略的語り手となるものである。

孔子觀於魯桓公之廟、有欵器焉。孔子問於守廟者曰、此為何器。守廟者曰、此蓋為宥坐之器。孔子曰、吾聞宥坐之器者、虛則欵、中則正、滿則覆。孔子顧謂弟子曰、注水焉。弟子挹水而注之、中而正、滿而覆、虛而欵。孔子喟然而歎曰、吁、惡有滿而不覆者哉。子路曰、敢問持滿有道乎。孔子曰、聰明聖知、守之以愚、功被天下、守之以讓、勇力撫世、守之以怯、富有四海、守之以謙。此所謂挹而損之之道也。(宥坐)

この対話では、下線を施したように、状況設定、孔子の動作、水を注ぐ弟子の動作など、語り手の語りが多く見られ、その間に孔子や守廟者、子路の発言が組み込まれている。登場人物として語る孔子達の発言は、語り手の手の中にあるとすることができるかもしれない。

以上見てきた孔子の対話は、叙述形式としては直接話法に分類される。この話法に関して、ジェラルド・ジュネットはフランス文学を研究対象とし次のように言う。

自由間接話法においては、語り手が作中人物の言説を引き受ける、というかむしろ、作中人物が語り手の声によって話すのであって、かくしてこれら二つの審級は、渾然一体と化す。これに対して、直接的言説の方は、語り手が姿を消して、作中人物が語り手に取って代わるのである。(203頁)『物

語のディスクール】(書肆風の薔薇 一九八五)

ところが、『荀子』においては、以上見てきたように、むしろ直接話法によって、語り手が姿を消し孔子が語るのではなく、孔子の口を通して語り手が自らの声を響かせる戦略のあったことが読みとれる。『孟子』に多く見られる引用から『荀子』に多く見られる対話内での語りへと孔子の機能が転換するのは、直接話法こそが、語り手が、引用という縛りを逃れ、自らの思いを自在に孔子に語らせることが可能だったからである。

これを、渡辺卓氏のように捉えることも可能であろう。

ここに現われる孔子は王者の理想的刑罰を提唱した荀子自身の投影であり…そこに形成された孔子像は、彼自身の思想や感情を結晶させたものにほかならなかった。「少正卯—孔子説話の思想史的研究(その四)」(『東方学』5 一九五二年)

氏に拠れば、荀子という語り手が、孔子をして少正卯物語を語らせたのである。とすればやはり、孔子の対話に見られる直接話法の戦略性が『荀子』にとっては都合のよい表現形式であったと行うことができよう。勿論、この表現形式の点からは、『荀子』にみられる孔子の対話が伝承であるか創作であるかの判断はできないが、その言説的戦略性の故に『荀子』が多く対話を採用したことは、孔子が実体性を伴う存在ではなく既に「語る／語られる」言説の人として記号化されて存在していることを明示している。^{xi}『荀子』の時代、孔子にはそのような機能が求められていたのである。

以上、『荀子』というテキストには、引用・独語によって孔子の實在につながる声を伝える実体化と、対話によって語り手の思いを孔子に語らせ孔子を作り上げていく記号化という全く異なる方向性を見出すことができる。これは「孔子とは誰か」という孔子の實在性に依りつつ、如何なることでも語ることができ、かつその自らの語りによって「孔子とは何か」という存在と機能を示すことで

きる記号的存在へと転換させるダイナミズムであった。

四 おわりに—「引用」から「語り」へ—

孔子の言葉を「引用する」ことは、それ自体孔子の言葉に対する解釈であることを免れないが、しかし、ここには、実在した孔子が実際に発した言葉であるという、孔子の声の重視がある。これは、声を手掛かりに孔子に辿り着けるといふ実体論的思考と「孔子とは誰か」という問との有効性を保証する。

しかし、孔子が対話し自由に「語る」ことは、歴史的に重要存在となった孔子の口を借りて語らせ、そこに語り手の声を滑り込ませる直接語法に分類される言説戦略である。この孔子の語りによって孔子を言説内に存在させ新たな孔子像を創り出しつつ、語り手の思いを語るといふ、語りを二重化させる言説戦略においては、語り手にとって「孔子とは何か」を読み解くことだけが可能であり、実在の孔子を辿ることはできない。

このように一発言の「引用」から対話における「語り」へという表現形式の小さな変化は、実は孔子の存在と機能の大きな変化を示していた。このような変化が何故『荀子』に見られるのだろうか。このことは、『荀子』の思想と孔子のそれとの隔たりのみではなく、先秦の言説空間がいかなる状況にあったかを俯瞰的に見なければ明らかにすることはできない。『荀子』に影響を与えたと考えられる『莊子』には孔子が登場する寓言が最も多く見られる。『莊子』寓言における孔子の機能を明らかにすることを通して、さらに先秦の言説空間において孔子とは何であったのか問い続けなければならない。

注

- i 「古代中国思想の研究」(創文社 一九七三)所収の孔子説話に関する論攷参照。
- ii 孔子の事件出来事にまつわる言及型の事実性と虚構性に関しては、別に論じたい。

記号化される孔子

- iii バフォーチン『小説の言葉』平凡社ライブラリー 伊藤一郎訳一九九六参照
- iv この聖を巡って、物語のレベルでは、「聖人之於民，亦類也。出於其類，拔乎其萃。自生民以來，未有盛於孔子也」と孔子を聖人化するなど物語化はすでに行われている。
- v 澤田多喜男『『荀子』『孟子』『左氏傳』所見『詩』『書』巧』（東洋古典學研究 19 二〇〇五）参照
- vi 様々な孔子の言葉が伝えられる中で、ここに挙げたテキストがそれぞれ孔子の言葉の取捨選択を行ったことは間違いあるまい。
- vii 文献考証的には、これらの諸篇は荀況の自著ではなく後学の編纂に成るものだといった議論がなされている。（金谷治『『荀子』の文献学的研究』『日本学士院紀要』9・1 一九五一、内山俊彦『荀子—古代思想家の肖像—』評論社 一九七六、を参照のこと）しかし、ここには口頭伝承と書記伝承の違いが考慮されていない。この諸篇はむしろ荀況の発言と伝承を口頭で伝えたものであり、天論篇、礼論篇といった書記伝承と遜色のない重要な言説であると考えられる。このような視点から、新たに『荀子』は捉え直されなければならない。
- viii 渡辺卓氏は、「少正卯—孔子説話の思想史的研究 四」（東方学五 一九五二）において、宥坐以降堯問までの五篇の孔子説話は荀子学派によって構成されたということを述べている。
- ix この形式の殆どは宥坐篇に見られ宥坐篇の特色となっている。
- x 孔子の卒年は479年、越が呉を破り覇者となるのはその後のことである。
- xi このことは、他の先秦のテキストを見ることで一層はっきりするだろう。

Confucius 孔子 who is symbolized

Keiji HASHIMOTO

In this paper, I considered how to deal with the Confucius's discourse in 『孟子(Mengzi)』 and 『荀子(Xunzi)』 from a viewpoint of narrative form.

『孟子』 only quotes the Confucius's speaking. It means that 『孟子』 regarded the Confucius's voice and his real existence as important.

However 『荀子』 not only quotes the Confucius's speaking, but also let Confucius narrate freely by using of direct discourse. Indeed 『荀子』 also regarded that the Confucius's voice and its real existence as important, but 『荀子』 is characterized by this narration, as a new function of the Confucius.

Based on this study we have to change the point of view of Confucius research from "Who is Confucius" to "What is Confucius."

And we must understand Confucius how to narrate, and what is his function of the narrator in the 先秦諸子(xian qin zhu zi)text.